

繪本太閤記

四編

二

1838
2238





1847
1833
38

繪本右圖記二篇卷之貳

目錄

栖賢寺廣德寺賜寺飲話

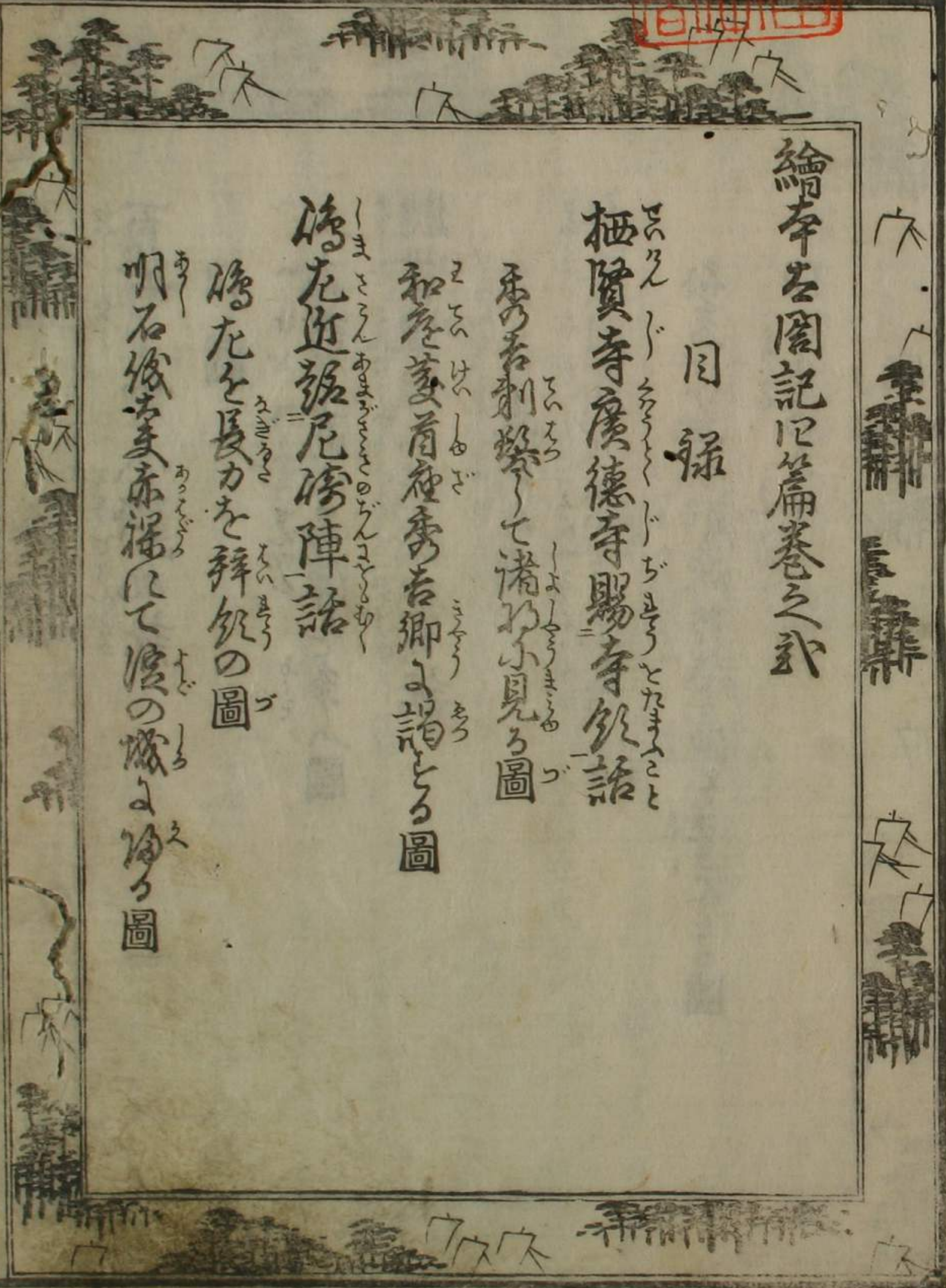
五の若利整て諸物小見る圖

和を菱首座秀若御の謂とる圖

鳴尾近坂尼勝陣話

鳴尾を長力を拜飲の圖

明石後妻赤搦にて浪の熾るる圖



青

百姓去即女執礼話

日圖

為計多高山先陣を幸ふ圖

羽柴惟任と徳信死之話

先秀の参内之圖

母后内務女諫言先秀の話

母后内務女内務所母を幸ふ圖

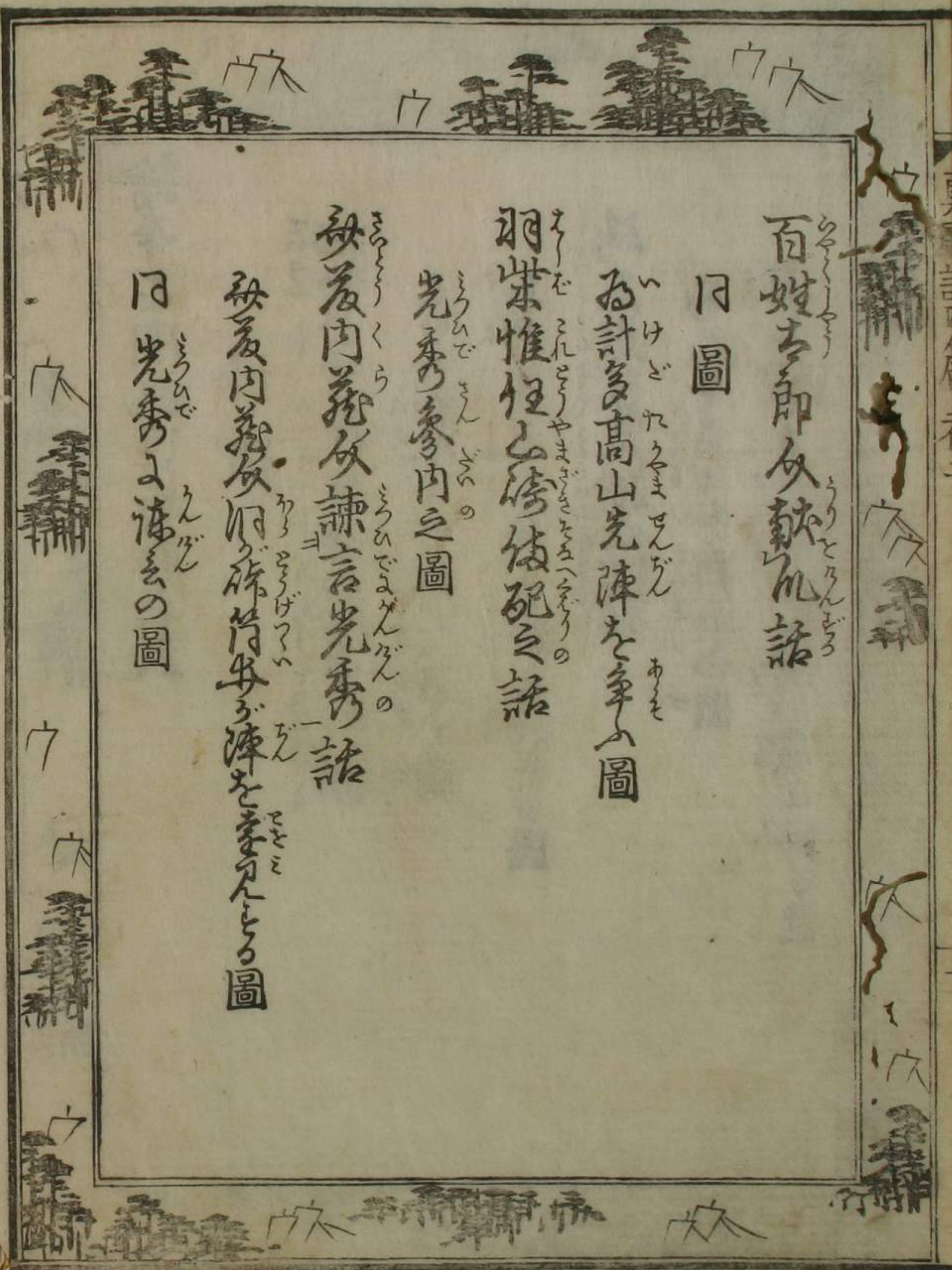
日先秀の参内之圖

繪本右圖記に篇卷之八

栖賢寺廣徳寺賜寺領

諸尊武候の曰く謀事在人成事在天惟任先秀深計を以て右大臣御
笑子を殺し今又秀吉を討さんと誓ての事あり國はあらず既に秀吉と討
ぶるに却ては且天の信ふがぬと殺され明石後をまの赤裸よく迎えり
独秀吉のこゝろは是れ先秀が謀拙きよりは且天の明石が勇なきにも
あはれ不謂事を計い人ありてを如く天にの者之此附虎之助の
寺内又ま入るるは虎之助御連ひより信ふことを素よりは是れ我君の
ついでにしまはれやと嘆り魚れどもまも世の寺傍にもいそぎよりの強動と
と皆方よは集りてををもつて居る時退く馳来る人いりて
勲兵衛をせめしは徳川行切多統率の統中河もは諸ともはけ寺

東夷巴田書目三十一

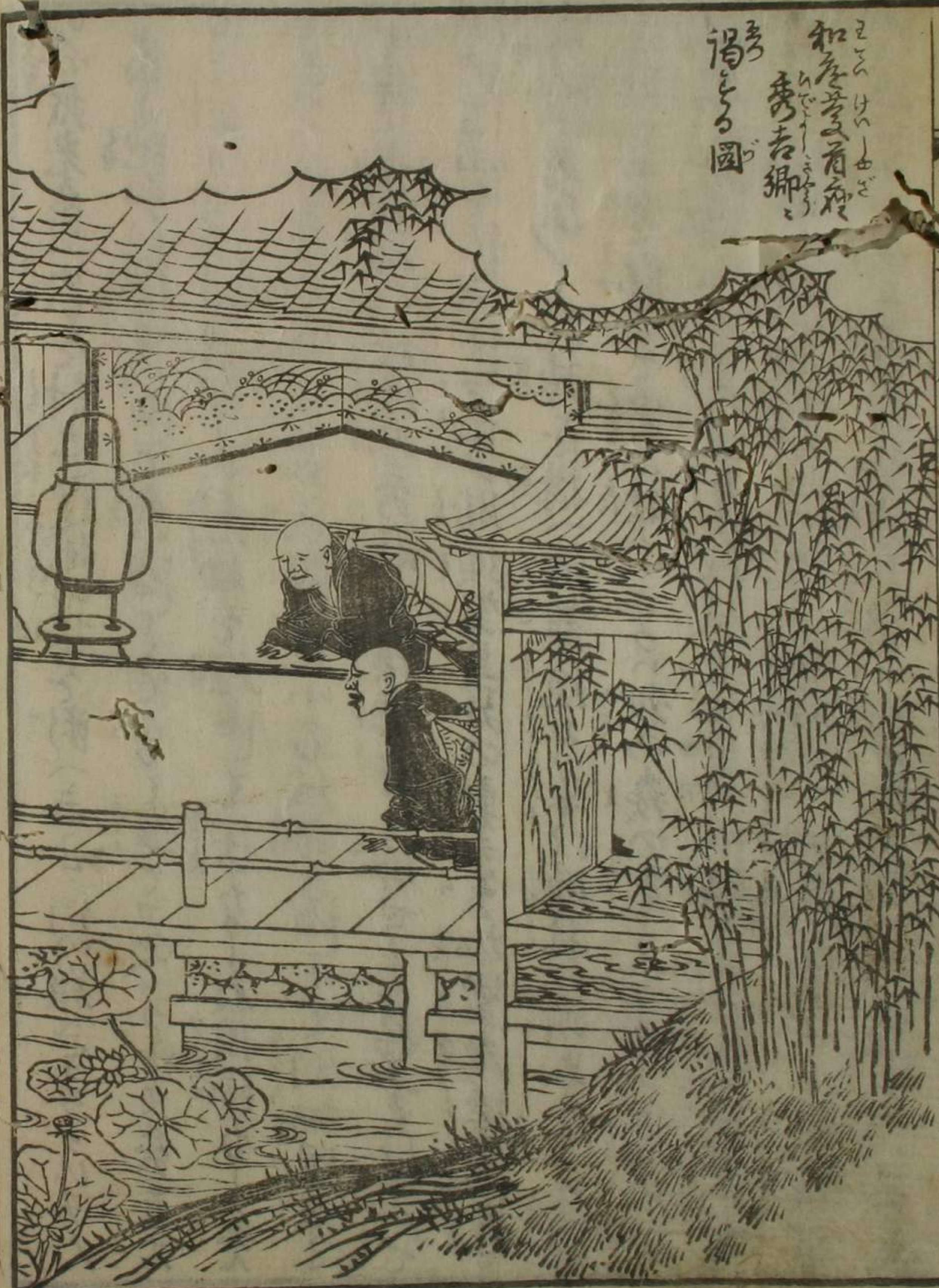
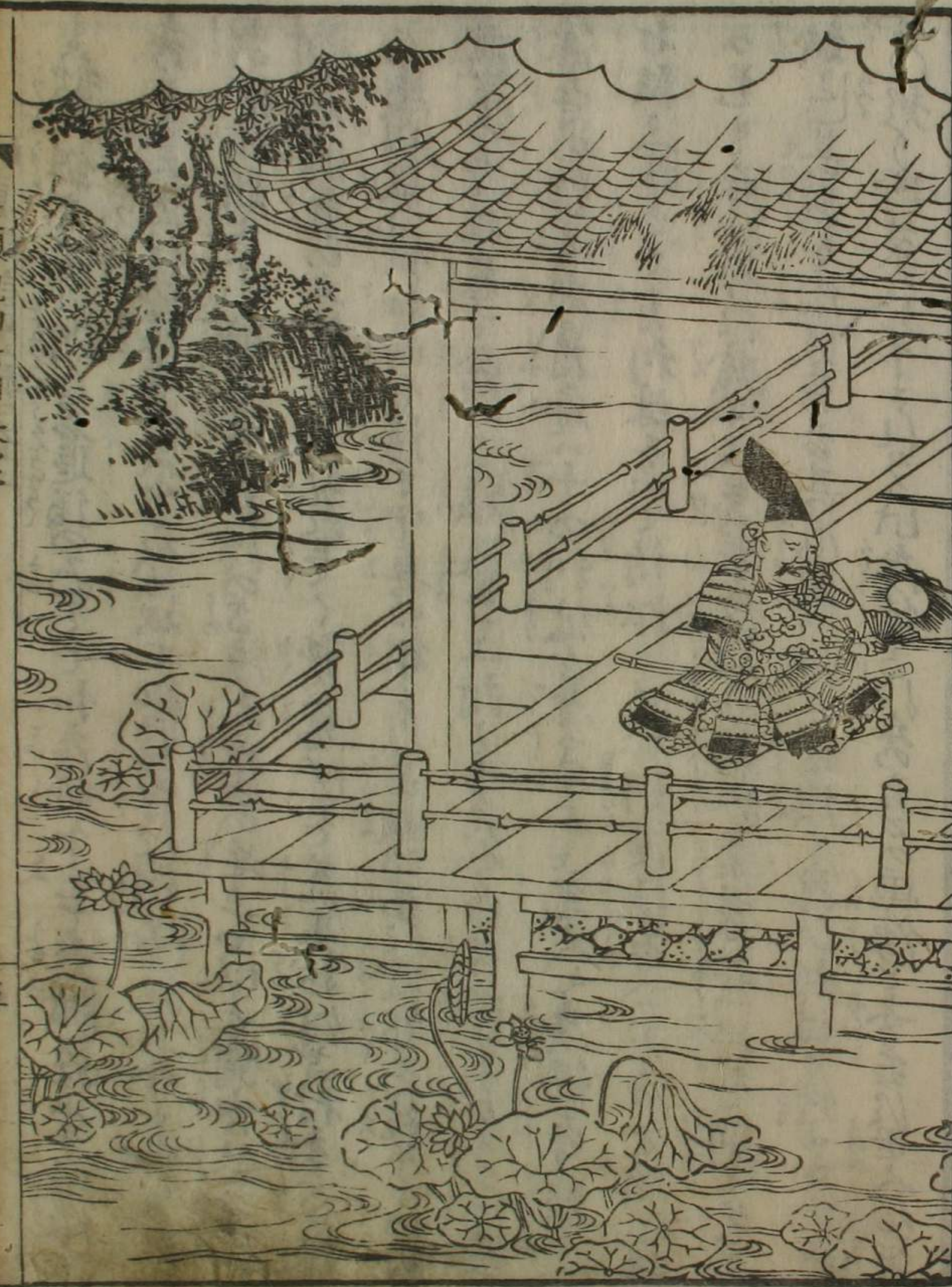




真言宗卷二

中より出入り百有七の妻を以て同く羽柴入を極賢寺の方より勅さしんを縁
秀吉を以ていふく宣へよ下の兵士二日は改をさげ皆万歳を唱へ侍りて
秀吉の御形體を以て思ひがけるき入らとあり候つとさる信長を以
て纏ひあへくもつぬ御姿を以て再び信長といふふとて將時を以て
うらり秀吉を以て笑ひ給ひ我れ討つとく吊ひ合戦を言へて若の御
膝りと教へまへんと候食を忘るる所なりゆ雲裏の中と歩初め候
只一人弛りしに不意も光秀が伏兵に逢ふと既へ危ううらふと天謀が
激忠を以て後へ給ひ惟但が秘薙の勇士に日天但馬守を欺き生れ命と全
くせり光秀を以て信長の退後を以て休めしむる表りし人々心を以ては此處
の我ひは身命を以て大功を以て信長の名を以て慰めなむとやと大音
みく御中知れ候心の區下いつても交り外候の勇士難兵士で今度

の合戦光秀一家を討て逆城の根を断べきや何の難き事ういふん
一高又弛向ひ綴垂に以て棄ててと勇進てくくふと秀吉大
きく給ひ給ひ我れ討つて危難を遁じし一方なりぬ因縁なり光
今宵の幽寺は一宿先君恩顧の大小名を以て別極賢寺と
奉陣と定め給ひ於次九秀勝を廣徳寺に陣せしめ給ふは以て
中河を山を以てめしと多勝領其外の勇士等極賢廣徳の両寺と
守護思ひしに陣を構へ難難鎗力に率に源林の湧出するうと給ひ
是冊史の思ひ給きて中河を以て秋の夜の電光は御りて極
賢寺の住持和を廣徳寺の住持茶首府西僧と石れ教へ御收ひの
芳河を以て砂金一袋づつ給ふと極賢謹んで拜候思ひ給りき今宵の
御後宿候事をもい侍の功なりけり示きは言とに及びしれが秀吉



己之けいしゆ
和名菅之府
秀吉卿
福之園

真言四篇卷三

も歎法解... 則之若退後... 秀吉天下... 此朝崇山... 尚七堂伽藍... 諸宗の寺院... 徳寺の監... 打飯... 是も寺... 軌... 其恩を... 御茶...

秀吉の御茶

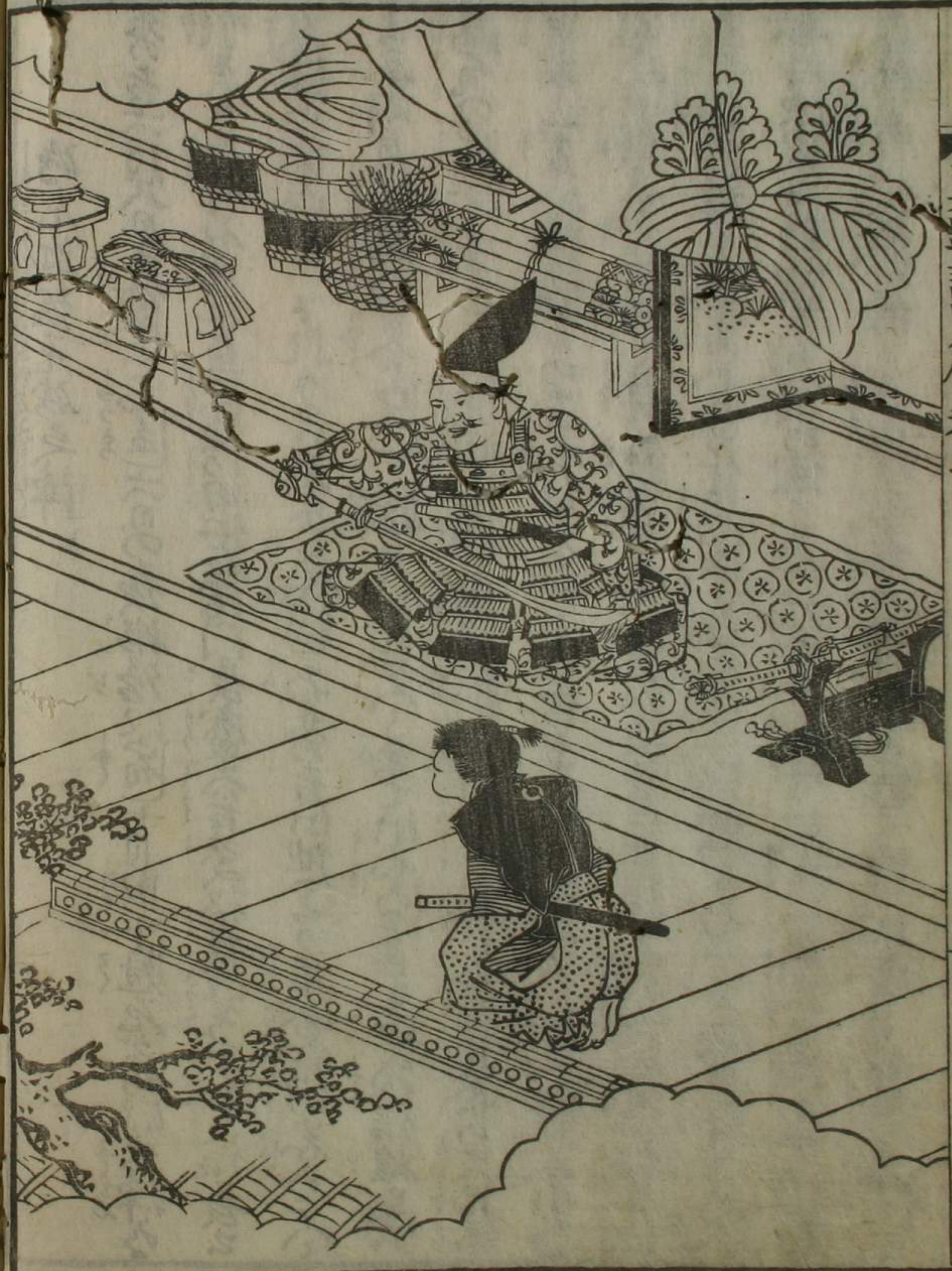
秀吉六月... 明日は... 病気の... 皆團... 不... 忍... 母... 年...

しと
たえ
の
長刀
の
園



真頼記の巻之三

真頼記の巻之三

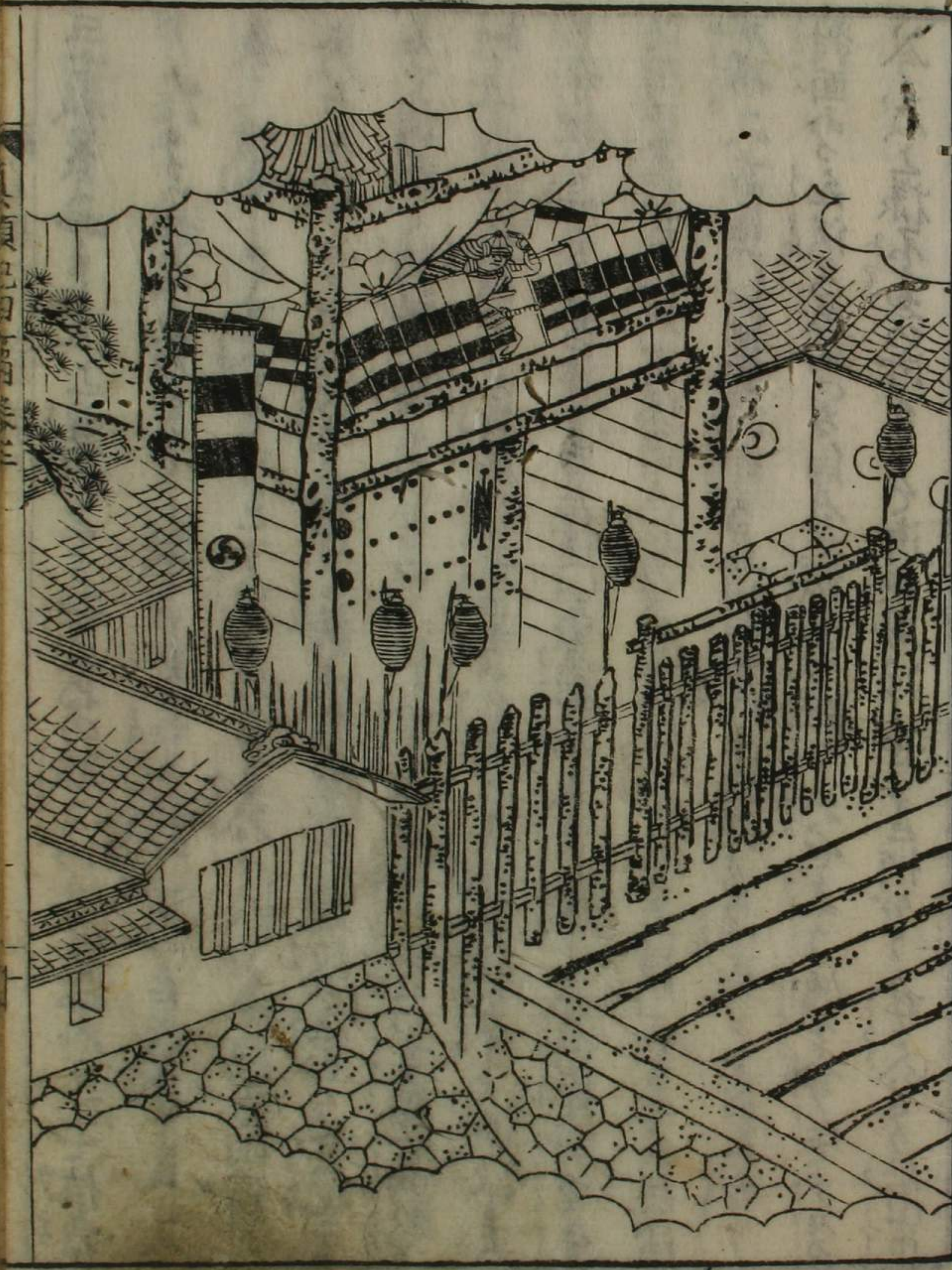


經休者即秀政降台出羽也其外近國の法勇幸のどく集り元勝に元漢
 せり討つ所に出張せし其の先勝は先秀のよきと加え
 秀吉則先近とて對面あり先近は先秀のよきと加え
 在りけり人質を送りて味方と振くと先近の叛は仁義の軍にりて
 んや依る軍勢二万騎の陣を先近は先秀のよきと加え
 利和知割加勢と連らし先近の陣出馬先近は先秀のよきと加え
 秀と先近の附其精と見合敵軍の後より切崩し中同じ有兼て先近は先秀のよきと加え
 んお小は先近のよきと加え先近は先秀のよきと加え
 計のよきも推し先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え
 先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え

心配がゆも後之は切初るるんは益忠勅を押ししるは厚恩なるべき同じ直臣
 中近は先近のよきと加え先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え
 白柄は先近のよきと加え先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え
 長刀とて名をせよと依りし先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え
 叔父先秀が先近のよきと加え先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え
 んと先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え
 侍氣は先近のよきと加え先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え
 且勝は先近のよきと加え先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え
 を先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え
 秀吉が先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え
 七十余の先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え先近は先秀のよきと加え

やま終らざるにいつともいふに其も其を討死と云りしるも
 此の若人言とら及び河の郷お遠侍んと押ゆぬ命と命は道
 いかりやうあしき河のいああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 河のああしき河のいああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 も怒るまなくいああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 を切ぬけたまのいああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 中し揚り天中の人民の命をわん身とありて若者と若者の勝負とありて
 謀計をひて討死といふも口惜しけれ討りしるも又可た若者と
 系都若とつたりとて河のああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 去語るああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 とまづつ腰をひていああ若死せしむる上り蓋て河のあ

されし今度のああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 死うらう群世のああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 与らうれ救よつああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 先秀ああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 せはああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 百姓を即賜奉れ
 去程は元徳の陣中の近國を臣の武士等追くし馳速にうらわぬ不日先秀
 と雄雄を安んじし軍の浮後ああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 ま三軍の命と目らるるああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 まい軍中おあつていああ若死せしむる上り蓋て河のあ
 軍後及ぼし羽軍若守若おあつていああ若死せしむる上り蓋て河のあ



明石の石
 俵屋
 福の城
 國

真景言四竹卷三

40

三七殿後は物とらるよ其いつて大おの穢よりうんや附は三七信者
中されたる我信長のまうとふも年若く兵少し秀吉兵多し年又
長し諸軍よく其命を守り曲て秀吉を助るべしと中河も山一も
秀吉を助るとせんとの愛を悔いし終に秀吉大おの恨を蒙り素籠を
きて諸軍と指輝と附は秀吉の上國を望みて近御近臣の士農工商殺
知次第止し思ひくの特物持者果は扇子の乳鬚を執事の中は天
皇守秋之坊今宮の神を右津門東淡郡妹光寺日秀と久矣回那明要寺
日所粟花利右津門大坂の町人松屋と右津門天日寺又兵備
危勝又右津門河原若那郎多母田村百姓を助るの如く秀吉出
對面あるは沢も母田の若郎女に穢血を懸く持せし源を合せて中
谷衣と様不意の御幸とて河地界河せよと何かうも移るは御用

御合戦のち遠く中園より御より付方々の大名方多勢出に御合
の首形よりまられ嫉しと心ざりしれ掛け物穴地は穢血をのこり切
河津足跡の帯とにと被持せし血筋より多く様より秀吉甚喜び
給ひ左右の諸おれより及く信長公本秋寺と攻むを給ひ
附給本軍三味方級小し一若御危難のゆゆは渠が室へせられた
危き難は道と給し其獲獲として彼は田地を賜ふ其御恩を亡却せし信
長の吊合戦を恨び老人の身の暑中を流し遠流を忘れ遠くの津に非
感出せしとんがふは流をを思ふは彼逆賊惟但光秀いりる者どもに
信長公は信し附は信長公は又百貫の文とかりしは今丹波近江の大名に
まると又十余万石の大名と附は信長公の正場へ亦かりしや山海より
と難き大恩を忘れ給し「なるは國賊とやらん歎心とやいせん御恩を忘れ



仇を
 秋に
 因る
 百姓
 ち即ち



真蹟言四篇卷三

十

のは我をばら二府の将率悉く信長公の恩恵を蒙りたる者みづから
 わざ今度の戦は務背碎身して運城先秀を討は真途美原にほしま
 と之君公男めちふし君恩と報らるの理りにも叶はれいおうきて面
 藤畧の合戦のつらと眼よりそらくと涙を流し身を看んで教訓の
 二府は生合諸将率陣足并み事りたる百姓町人并み寺僧も
 まで忽怒り天を突候先秀我百万騎の軍率わりとも務のたぐらこ
 てやいとて拳を打ち齒と噛し又打まんと形勢之勇をよく表すと増し
 彼れをきてつら切割諸將率にかりと今も即分中とまじや空
 地は極つら我れをのつら切を持来世とや明智の二堂悉く斬殺と君公の
 有るも表なるぞ誇りけれを賞味して勇人と軍陣に向つと下は
 諸軍一日方歳を唱勇も眩るも阻らば元来秀も古く味るもの名
 候て開運なるの勢は幸と就て軍率の英氣と誇盛百万の兵士と今も
 今更のどく自便をぬれ燃え希代の良将は日月朝野終多永政と後と
 して先秀の方中進つら羽柴統元守之君信長公御父も吊合戦の
 候までより先秀十三日双方合戦を起し兵を以て潔く一戦と遂
 ぐといはれ合戦の場所何方は定むべきや其方の差圖は依り青中進ら
 先秀の善て元来統元水にの戦場は折原山傍古今軍場とてはる彼地は
 押して十三日辰上討候と合つら兵を率て強攻をよむは先秀も右
 の陣中先秀其の死をぬれ討はる計まね入候をよむ今度の合戦先
 陣と余人も後と合つら兵を率て強攻をよむは先秀も右
 右辺又進で回故右大臣御生母の討先陣と定め終るは大概地理は委し君と
 以て是と但せらるる三軍の用きをかりぬる某が居候は折原の概にして

のは我をばら二府の将率悉く信長公の恩恵を蒙りたる者みづから
 わざ今度の戦は務背碎身して運城先秀を討は真途美原にほしま
 と之君公男めちふし君恩と報らるの理りにも叶はれいおうきて面
 藤畧の合戦のつらと眼よりそらくと涙を流し身を看んで教訓の
 二府は生合諸將率陣足并み事りたる百姓町人并み寺僧も
 まで忽怒り天を突候先秀我百万騎の軍率わりとも務のたぐらこ
 てやいとて拳を打ち齒と噛し又打まんと形勢之勇をよく表すと増し
 彼れをきてつら切割諸將率にかりと今も即分中とまじや空
 地は極つら我れをのつら切を持来世とや明智の二堂悉く斬殺と君公の
 有るも表なるぞ誇りけれを賞味して勇人と軍陣に向つと下は
 諸軍一日方歳を唱勇も眩るも阻らば元来秀も古く味るもの名
 候て開運なるの勢は幸と就て軍率の英氣と誇盛百万の兵士と今も
 今更のどく自便をぬれ燃え希代の良将は日月朝野終多永政と後と
 して先秀の方中進つら羽柴統元守之君信長公御父も吊合戦の
 候までより先秀十三日双方合戦を起し兵を以て潔く一戦と遂
 ぐといはれ合戦の場所何方は定むべきや其方の差圖は依り青中進ら
 先秀の善て元来統元水にの戦場は折原山傍古今軍場とてはる彼地は
 押して十三日辰上討候と合つら兵を率て強攻をよむは先秀も右
 の陣中先秀其の死をぬれ討はる計まね入候をよむ今度の合戦先
 陣と余人も後と合つら兵を率て強攻をよむは先秀も右
 右辺又進で回故右大臣御生母の討先陣と定め終るは大概地理は委し君と
 以て是と但せらるる三軍の用きをかりぬる某が居候は折原の概にして



いけ
お計多
高山
兄弟
先陣を
辛人
國

山崎の陣より今度の合戦は先鋒より人若某より外にあるのは二陣と
 中河勢平や良也其流の中河が地は日國城本らるるは是則二陣より良也
 三陣より良也と物又きれきりも息をひききつた城よりを以て其合戦
 順方良也某不流の地と合戦の地は先陣と集まて何面目も再び人
 二面と對するや信長公の靈も照流あり八幡先陣は人後とは二面を
 を遠多ひる秀吉此軍ひを以て山や宗先陣は忠より先ひお入敵先
 功の武者後より進退と助けられと陣配は空りたり中河勢平
 も進て先陣と軍かけ居りしる山が隈の河は宵き難く二陣とこそ
 を定めし

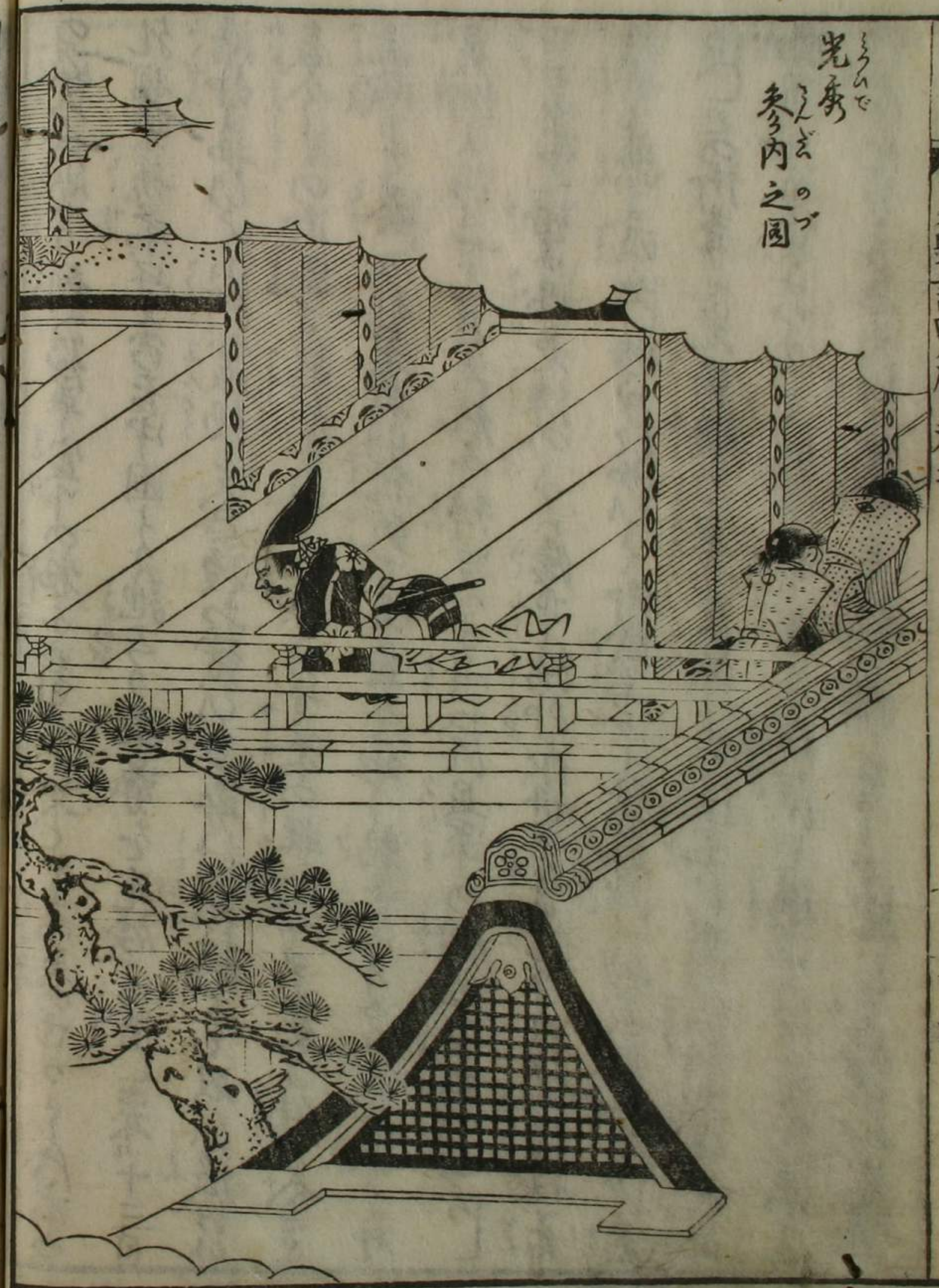
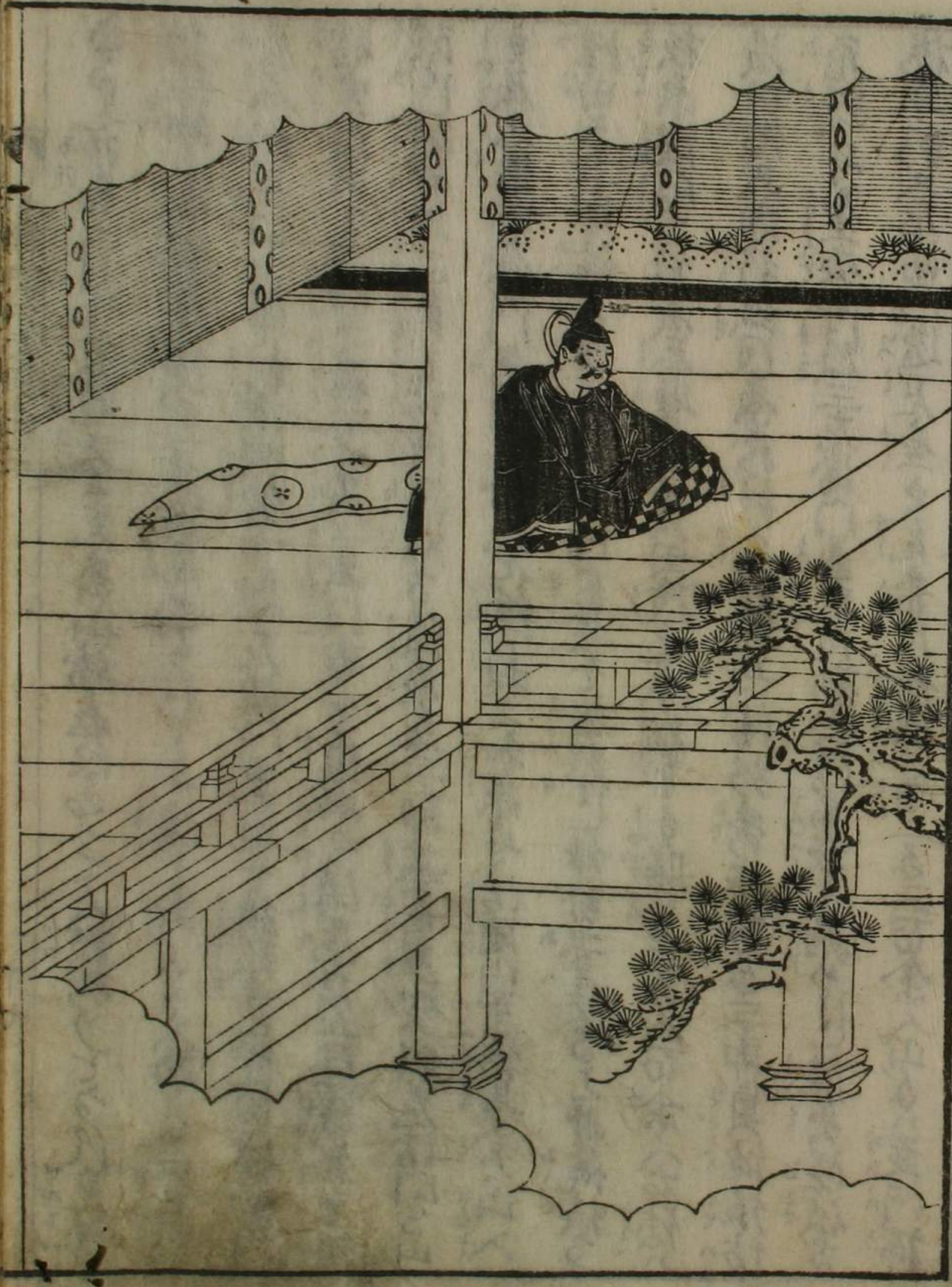
羽柴惟任山崎陣記

時惟任先秀の自ら希都の旗を立家臣三宅及兵衛を勝龍寺の城より

秀吉の陣の城より番匠大炊氏伏見の池田織部守治の奥田庄を去坂本
 に教文明智の用長原の妻本を計匠佐和山は荒木山城守妻云明
 智九馬女背巻く精兵をお護て秀吉を其身の系都に立てて政
 めを正する事討軍に任じし願仁義の仕立も多うりし縁と求
 め固よりして先陣と若敷を以て先其怒る者より修勢安房守門
 水月監物と時流後守日大守修長志摩守松原渡守日修後
 長三郎破陣正の困流守日万又即大津甚に即多賀新又右
 湯門を山を度久徳六九湯門遣見堂之惣香川刑部細田を馬女左
 田指之助松本を膳園八郎を支平回八郎次郎流見原守松原新又九
 湯門を橋虎之女を瓜始ちと或は又十騎三千騎打連く雲霞のてく
 集りたる是に日向先秀方を以てし軍のよこしき勇士たると

つゞく敵と味方の分際をなほよ秀吉方信長の吊合戦と善代恩顧
 の者とも必死なれど向ひぬまは三軍より一戦は味方の諸方の考合戦
 とは勝利を得たにも勇まじく敵をなぐり忽ち教せん宴をなして思ふに
 の合戦こそ身の上乃大幸にこそ持て玉まをぬじり多うやく勝敵運
 の運は是れ天のまはる吉川小又川と挟んで秀吉討んとる回信八郎を
 せせりしめぬしや吉信は再び死傷しては死んて我勇吉に天明石
 のあ雄を失ひつゝ我吉も軍の便を蒙りきたるき合戦をなさん口勝
 不冷運を天に任せぬ者の戦を以て勝利を得た天下と掌握見級と
 不潔く討死と心悟道免りし十一日未明赤内を遂げ我軍
 相道御難波中納言宗を御を執道として合子又百両百足綿
 又百担を敵に送り且奏してヤウの官先秀吉信長とに不意に天下

の以ては秀吉の劇へお軍宣下の勅を蒙りて下りも未天の由りては
 先羽柴秀吉守秀吉中園より馳より軍勢を尾崎へ會し五月十三日
 洛外に於て山河震動と云はるお戦ひ言勢討死仕へと思ひ及けい
 表今月の御膳は龍教を拜しなむ生茶の怪ひ何ゆらそ又勝たきと
 流涙して涙しれど我羽林於て天意を承り勅書あつる龍神今も御
 是例よりせらる天敵を拜せん叶ひ具軍の勝敵は云廷の志し
 ちどる不地も沙免降のり洛中洛外永世の憂懐りれ必此様若
 後世子孫よ及之此のに於て御感あつる凱陣の時天意を承りし
 及しこの御事先秀難を余り為成して退出此時仙仙如院去九
 御百両百官よりと悉く令帛を敵道して退きたるこそ死後と
 の深たかりきされども終り天敵を拜しなむ生茶の怪ひ何ゆらそ又勝たきと



光秀
参内之圖

貞言四卷之三

七

きのの之孫^{あは}六月十二日^{むかし}曉^{あけ}天^{あま}光秀^{みつひで}山崎^{やまざき}表^{あらわ}なりて人殺^{ひところ}りてその光秀^{みつひで}
 を三返^{さんげん}と^と其^{その}中^{なか}備^びえ^えの^の固^{かた}め^めなりて^と機^{はり}を^を出^だし^しる^る大^{おほ}なる^{なる}敵^{たて}を^を
 秀^{ひで}友^{とも}利^り三^{さん}日^{にち}大^{おほ}郎^{らう}利^り次^じ明^{めい}智^ち十^{じゅう}郎^{らう}九^く清^{せい}門^{もん}光^{こう}近^{きん}を^を統^と率^{すう}し^し柴^{しば}田^{でん}源^{げん}九^く清^{せい}門^{もん}
 勝^{かつ}定^{てい}日^{にち}忠^{ちゆう}秀^{しゆう}勝^{かつ}之^の奥^{おく}田^{でん}宮^{みやう}内^{うち}一^{いつ}武^ぶ日^{にち}市^し之^の懸^{けん}勝^{かつ}之^の備^び屋^や兵^{へい}清^{せい}茂^{もう}初^{はつ}を^を紐^{ひも}
 取^とり^りし^し礮^か射^{しゃ}彈^{だん}正^{せい}真^ま意^い下^か閉^{へい}淡^{たん}活^{かつ}を^を後^ご茂^{もう}三^{さん}郎^{らう}基^{もと}之^の多^た賀^が新^{しん}九^く清^{せい}門^{もん}山^{さん}
 重^{おも}茂^{もう}之^の德^{とく}九^く清^{せい}門^{もん}等^らより^{より}余^あ人^{ひと}九^く清^{せい}門^{もん}村^{むら}上^{かみ}和^わ泉^{せん}守^{しゅ}清^{せい}國^{くに}山^{さん}中^{ちゆう}對^{たい}馬^ば入^い山^{さん}入^い
 澤^{さわ}田^{でん}三^{さん}郎^{らう}信^{しん}意^い進^{しん}士^し九^く清^{せい}門^{もん}真^ま運^{うん}を^を旗^{はた}取^とり^りし^し任^{にん}務^む安^{あん}房^{ぼう}等^らと^と押^{おし}籠^{かご}後^ご等^ら
 松^{しょう}原^{げん}隆^{たか}政^{せい}守^{しゅ}任^{にん}茂^{もう}守^{しゅ}庄^{さだ}田^{でん}後^ご之^の女^め松^{しょう}中^{ちゆう}自^じ勝^{かつ}等^らより^{より}二百^{にひゃく}余^あ人^{ひと}右^{みぎ}備^びの
 后^ご田^{でん}仍^{なほ}又^{また}郎^{らう}仍^{なほ}改^{かへ}日^{にち}茂^{もう}秀^{しゆう}之^の久^{ひさ}日^{にち}信^{しん}兵^{へい}清^{せい}初^{はつ}秀^{しゆう}任^{にん}務^む与^よ三^{さん}郎^{らう}真^ま仲^{ちゆう}後^ご訪^{ほう}
 飛^ひ彈^{だん}守^{しゅ}聖^{せい}重^{じゆう}河^か取^と三^{さん}九^く清^{せい}門^{もん}並^{なら}日^{にち}勤^{きん}兵^{へい}清^{せい}並^{なら}次^じを^を始^{はじ}め^めし^し深^{ふか}谷^や隆^{たか}政^{せい}守^{しゅ}
 攝^{せつ}丹^{たん}新^{しん}九^く清^{せい}門^{もん}造^{ぞう}日^{にち}堂^{だう}之^の九^く清^{せい}川^{せん}刑^{けい}部^ぶ等^らより^{より}二百^{にひゃく}余^あ人^{ひと}山^{さん}中^{ちゆう}並^{なら}河^か攝^{せつ}

郡^{ぐん}易^{えい}家^け日^{にち}八^{はち}女^め易^{えい}武^ぶ松^{しょう}田^{でん}之^の郎^{らう}九^く清^{せい}門^{もん}以^も近^{きん}妻^{さい}太^{たい}忠^{ちゆう}九^く清^{せい}門^{もん}龍^{りゆう}武^ぶ被^ひ射^{しゃ}た^た云^い
 清^{せい}茂^{もう}與^よ波^は伯^{はく}部^ぶ指^{さし}改^{かへ}真^ま次^じ加^か次^じ石^{いし}守^{しゅ}經^{きやう}房^{ぼう}酒^{しゆ}井^い孫^{そん}九^く清^{せい}門^{もん}忠^{ちゆう}武^ぶ日^{にち}と^と美^み
 忠^{ちゆう}从^{じゆう}和^わ田^{でん}重^{じゆう}女^め政^{せい}長^{ちやう}等^らより^{より}三百^{さんひゃく}余^あ人^{ひと}後^ご陣^{じん}の^の先^{せん}秀^{しゆう}が^が旗^{はた}中^{ちゆう}去^さ彼^か兵^{へい}を^を美^み元^{げん}
 日^{にち}才^{さい}を^を美^み元^{げん}次^じ明^{めい}智^ち兵^{へい}助^{すけ}光^{こう}次^じ中^{ちゆう}次^じ後^ご守^{しゅ}知^ち總^{そう}比^ひ回^{わい}市^し力^{りき}初^{はつ}村^{むら}三^{さん}
 十^{じゅう}郎^{らう}系^{けい}列^{れつ}安^{あん}田^{でん}他^た兵^{へい}清^{せい}國^{くに}次^じ三^{さん}宅^{たく}孫^{そん}十^{じゅう}郎^{らう}初^{はつ}次^じ堀^{ほり}口^{くち}三^{さん}之^の懸^{けん}滿^{まん}之^の日^{にち}三^{さん}美^み真^ま
 教^{きやう}源^{げん}源^{げん}昭^{しやう}順^{じゆん}之^の用^{よう}田^{でん}右^{みぎ}郎^{らう}八^{はち}武^ぶ章^{ちやう}山^{さん}本^{ほん}三^{さん}九^く清^{せい}門^{もん}附^つ真^ま等^らの^の勇^{ゆう}士^し七^{しち}十^{じゅう}余^あ人^{ひと}
 其^{その}勢^{せい}又^{また}余^あ人^{ひと}又^{また}軍^{ぐん}合^{がっ}て^て二^に万^{まん}八^{はち}千^{せん}又^{また}百^{ひゃく}余^あ人^{ひと}水^{みづ}を^を拮^{かく}抗^{かう}の^の級^{きゆう}分^{ぶん}け^けし^し九^く本^{ほん}旗^{はた}
 日^{にち}の^の志^しを^を一^{いつ}の^の馬^ば平^{へい}川^{せん}に^に吹^ふら^らび^びを^を母^{はは}衣^いけ^ける^る後^ご番^{ばん}二^に十^{じゅう}余^あ人^{ひと}嚴^{げん}重^{じゆう}に^にる^るこ
 引^ひき^きせ^せ懸^{けん}く^くこ^こを^を備^びへ^へる^る羽^は柴^{しば}方^{かた}は^は日^{にち}山^{さん}崎^{さき}表^{あらわ}へ^へ出^で張^{ちやう}一^{いつ}倍^{ばい}破^ぱの^の次^じ等^ら
 先^{せん}陣^{じん}を^を山^{さん}右^{みぎ}近^{きん}長^{ちやう}房^{ぼう}又^{また}百^{ひゃく}余^あ人^{ひと}中^{ちゆう}河^か原^{げん}平^{へい}之^の百^{ひゃく}余^あ人^{ひと}堀^{ほり}川^{せん}仰^{おほ}若^わ等^らに^に百^{ひゃく}余^あ人^{ひと}
 合^あて^てよ^よ又^{また}百^{ひゃく}余^あ人^{ひと}其^{その}次^じに^に堀^{ほり}原^{げん}を^を郎^{らう}秀^{しゆう}政^{せい}一^{いつ}千^{せん}又^{また}百^{ひゃく}余^あ人^{ひと}其^{その}次^じに^に堀^{ほり}井^い多^た等^ら

三人三人余人次之是角又即左衛門長秀三人余人次之
 者曰余人次之降者出羽守一人後陣の惣大将羽柴統元守秀長
 牙羽柴長秀長秀長行三好孫七郎秀次相後勇吉多勤兵清
 考其子孫兵清長政勝須賀小六郎政勝朝井孫平永政日孫吉幸
 長中村武郡一氏中村若助近心山内九郎一孝寺法志摩守心業馬
 源番多木村牟人定輝尾原助吉勝吉本勤兵清秀松原士郎右衛
 門家次田中久兵衛右政右田右三成堀田仁右衛門長忠大谷友松右衛門
 虎之友信心小西孫九郎長斤切助他且元長本之孫心孫福徳市松心切
 備坂彰内妻妻糟谷助右衛門政次等の勇士百余人其勢都合二万三千余
 人七軍合て二万七千余人なり

母及内親女侍言先秀

丹波津と郡美日其の庄屋其の心猪口山の城を破る内親女利三先陣中
 彼の旅路より今度の合戦は先秀が身一と戦ひ智恵あり先秀信長
 云を怒り余世其起り此内親女福榮孫孫入るへ渡来せざるなり
 次牙の眼をまじり終戦なほまじりされ今度の戦ひは打死して
 先秀の恩を報せんと一歩も思ひ定められ烈々働きをば敵味方の目と
 驚かさんと牙大郎利次と兵二入十二日の晩密にゆく羽柴の陣は彼
 をとくと見ゆつ又羽柴の陣は彼と見え遠く見れ陣を以てゆく牙
 大郎を先秀が本陣(港)の中其今朝より敵陣及び地理の高低を
 多見ゆつては不意敵軍の其勢三万斗と見え介し山崎川中河を牙
 多皆自國の戦ひかれ地の理を得て近引小石を懸て懸く自中とゆ
 味方の勢い方は是より化國の働き地の理は暗し其と一具の威は腹せし

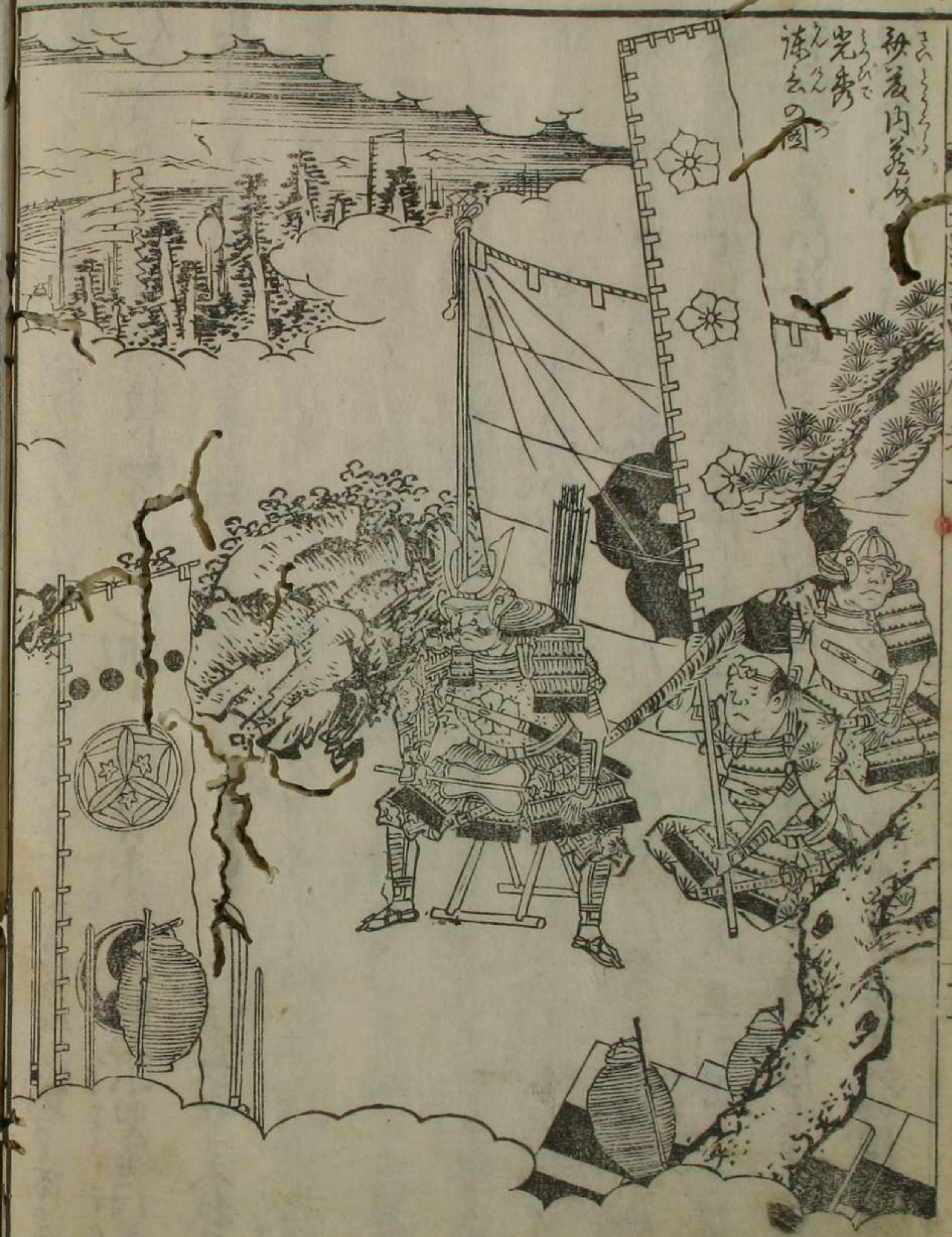


母屋内蔵
何れか
符
舟
陣を
見る
と
何
國

真蹟記四竹卷三

諸國の勢令幾うとまゝに相とる小足は又阿蘇の得兵が城とる
是令々味方の儀よりけりて却て裏切るとも換換かくれとて未幾は
先は敵は三ツの裡あり味方は三ツの先あり將軍の冷とる不始終乃
勝こそ奪國のしるべき此場と退き京都をり捨給ひ丹波引入山平の谷
後を塞ぎ本石切て左右の切岸は積りけ替代の良士斗を在て龜ら
籠城せし若らるんは尤も女を以て去とも捨く十郎九郎門先道とあ人
の勢斗と引て坂平は勢城の某は場をにゆり歩り考合勢と一徳と
は勝負と一念にけり烈しき敵はきくそは九郎は羽柴方勢いけ
内裏は味方よりよとふおき言ふはよく樹の東東のさうりりり
急ぐと定みはとちりる者未幾はしりて乞とて啗著くやうの利三が計
第一のつた乞又汝達の知るる本軍の勢のまらようは必大なる強

隠あり羽柴是角為斗多るが運立に我道て乞とて乞とる何の思とあ
んや彼亦も我勇武の行い知りわし信者も未幾の弱小思も月不
其外も山中川松川の軍論はるは信長をえ我乞
を討て京都の政を成るに極し我今汝等と心を二枝うり羽柴是角
お斗多ると切破らば兵勢のぶく私とるの陣をわぐはべぐは具又
竹取城の日は我と兄弟の交りたり未羽柴是角為斗多ると交り候
さまと交り其我と交り契約あはれ何を敵とせんや彼是危むるの
く先陣は進も強く我へとあはれ大八郎大に驚き急ぎ我陣は
ゆり介の軍内我女と信りえは内我女も信法至利必勝の斗兼
を敵とすは強くはくそ懸けは是吟一應本陣へ入り強て候と中よと
つた大八郎の又先秀の義出く細川統中とる思入は候しよと



まゝ
秘儀内
光秀
海玄の
圖

書顯言四篇卷三

九

内務女を流し推定氏の運命も今日も危りなり三條めて徳三郎の
引退くは君のあはれはて其難を難が引退の道之今一計と申し
一戦しては討死せんとて柴田源九清門晴定と討て彼が勢一人
又才大に即利次は我勢一人を打ち都合三人余人を軍とほし
勢が衰切せん討不意を討て切崩しと申合ふ体へくを推し世に
大山とてしお輝くべき勢ひ之先秀此内務女が海を又陸に近
丹波の内引退き石馬女とて多に如く支へ我ひるが始終の如く
滅せざるゆゑはしよは運のまじしむ不なるやと口惜りき次
才かり

按じろ小光秀智勇兼備の如く内務女流らに降いざるは深き思
其の信長と本懐等しく戦遂其身天下の武將

海軍の掌にせん欲する志の皇小人匹まの如く後方る怨を後にして君を
 ころのみや脱々天が中知は又月武の台とて天下を争ひ志明之定とて君の
 命我の運と天の運と争ひ先を勝利と得て先を討つる急威
 勢海軍の鳴り諸國の去るを我に討て先を討つる急威
 を逆仁急とて民を極つて天下を掌握して又味方討員先を勝利と
 ばく討死してとて思ひ定つて内務が中如く君を退き龜山又坂中を籠
 城せ先を威名に裏唯死せざるが事山の山期業とる人の討つる
 信長在世の時先を丹羽の及十金方石の去るを今龜山に退き天下の諸國と
 悉く敵に交圍窮て城とあり信長を殺せざるを先を何れ金儲
 としてあり外圍退くべきや君の命我に討つる急威
 とて内務が中如く君を退き龜山又坂中を籠城せ先を威名に裏唯死せざるが事山の山期業とる人の討つる

一

二

三

